

---

# 戦の世に咲く恋の花

氷川類

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

戦の世に咲く恋の花

### 【Nコード】

N5708S

### 【作者名】

氷川類

### 【あらすじ】

「は？何だこれ……」

ある朝玄関を開けたらそこは戦国の世でした。by克己  
BLですが性的な表現はありません。

短編

その日もいつもと何ら変わらない日常が繰り広げられる筈だった。

六時に起床して朝風呂で軽く汗を流し、新聞を読みながらトーストをかじる。世界情勢を知るのは良い事だし知識を詰め込むのは嫌いではないから。

食事が終わったら制服に着替え両親が眠る仏壇に手を合わせ朝の挨拶をする。

そして、昨夜の内に準備してあった鞆の中身を念のため確認し、足りない物があれば補充してから学校に向かう。

2

一人暮らし歴三年ともなれば大体の事は自分のリズムで流れが出てくるもので、今日も例に漏れず流れ作業を終え勢い良く玄関の扉を開け放った俺は、目の前の光景に息を飲んだ。

振り返り閉まりゆく扉に必死で手を伸ばした。  
だが、いくら手を伸ばそうがそれは空を切るばかりで扉には届かない。

願い虚しく唯一の手がかりになったであろう我が家の玄関は、パ

タンという音と共に消えた。

「えっと……何これ？」

パニックなどと言う言葉では全く足りない程の混乱。  
両親が死んだ時でさえこれ程までに頭がぐちゃぐちゃになりはしな  
かったのに。

呆然と眺めた景色はどこまで行っても見渡す限り一面焼け野原。  
例えるならそう、ここはまるで戦場かのように荒れ果てている。

3

「だけど……そんな筈はない。」

自慢じゃないが俺の家は高級住宅街にあり、周りは人も羨む豪邸だ  
らけだった筈。

だが辺りは血の臭いに汚染され、豪邸どころか建物すら一つも見当  
たらない。

「痛っ……ん？」

何かに足を捕られ視線を下に移した。

足元に転がっているのは鎧の残骸らしき物と、人間の残骸らしき肉

片。

「うわあああつ、な、な、何だよこれ！……ああもう無理」

肉の焼ける香ばしくて吐き気のする臭いに包まれながら俺は、ありえないこの状況に精神の限界を迎え意識を手放した。

同時刻

黒く煤けた焼け野原を一人の男が歩いていた。

朱色の甲冑を身に纏い、酷く傷付いた体を引きずりながら、どこを目指すでもなく歩いている。

立っでいられるのが不思議なぐらい激しい傷を負っているにも関わらず、男の目は色を失うどころか紅蓮の炎にも似た激情に染まっていた。

右足に受けた刀傷から流れ出た鮮血が地面を汚し続けても、男は歩みを止めない。

「奇襲を見抜けぬとは……頼忠一生の不覚だ。私にもっと力があれば……」

割れた兜の隙間から覗く瞳は深い悲しみに染まり、噛み締めた唇には後悔と激しい喪失感が滲んでいた。

「私のせいであの者達は……」

男はやおら立ち止まり、空を仰いだ。血生臭さに包まれた戦乱の世にあつてなお、空は何事もなかった様に澄んでいる。

「戦など……あつてはならんよのう……」

男はそう小さく呟き視界を塞いだ。

目の前に倒れている少年に気付く余裕など今の男にある筈もなく、少年に覆い被さるような形で男は気を失った。

「どっついても守れない……何故私はこんなにも弱い？」

……誰？

頭の奥が痛い。

同じ疼きが胸の奥にも広がり警鐘を鳴らす。

それはもどかしい疼き……

曖昧な痛みを底へ追いやる様に俺はゆっくりと目を開いた。

あれ？……ここは？

見覚えのない部屋の中央で、埃まみれの布団に体を包まれ俺は横たわっていた。

寝ぼけていた頭が徐々に覚醒していくと同時に、俺は自分の身に降りかかった訳の分からない状況を思い出した。

俺、倒れたんだった。てか今の声は……

聞こえてきた弱々しい声に誘われるままに視線を向けると、部屋の縁側に一人の男が腰掛けていた。歴史の教科書から飛び出してきたかのような朱色の甲冑を身に纏うその姿に、何故だか胸がざわついた。

「あの、すみませ……ッッ」

ぼんやりと空を見上げる男の頬に光る一筋の涙。それを隠そうともせず男の視線がこちらへと動く。

「今宵は月が綺麗だろう？」

「え……？」

呑気に月なんか見てる場合じゃないって事くらい分かっていたけれど、男の問いに抗う事が出来ず、男の視線に誘われ俺は空を見上げた。

「うわぁ、綺麗……」

それは例えようのない美しさで、真ん丸い月の周りをつつすらと蒼い光の輪が囲み、雲一つない空に凜とした涼を与えている。月なんて見飽きる程見ていたのに、こんな表情は初めてだ。

「マジ綺麗っ！ちょっと俺感動しちゃった！写メ写メ……携帯家だった。クソツ勿体ない、こんなに綺麗なのに！」

興奮気味にまくし立てながら隣りの男に目をやると、群青の瞳と視線がぶつかった。

柔らかく笑む男の表情に胸が騒ぐ。

「あ、あの……」

「ああ、幸せそうだなと思って……お前、名はなんという？」

「名？あつ名前か……江崎克己です。あなたは？」

「長谷川頼忠だ。お前私を知らぬのか？」

「え……あ、知らないです」

「そうか、知らぬか。そうか……」

一瞬、知らないなんて言っただけ失礼だったかなって思ったけど、嬉しそうな男の表情を見ればそれが失礼に値しない事なのだと分かり、俺は胸をなで下ろした。

でも、知らないって言って喜ぶなんて変わってるな

「あの、ここは何処なんですか？」

言葉は通じるのだから、外国って事はないのだろうし、部屋の造りも和室そのものだから日本には違いないのだろうけど、何かが違う気がする。

言葉で表現するのは難しいけれど、ここは確かに存在しているし、俺も長谷川さんも確かに居るんだけど、俺と長谷川さんを包む空気が違う、という不思議な違和感が俺を包んでいた。

長谷川さんの発した言葉は短かったけど、俺を驚かせるには十分だった。

ここに来て初めて見た焼け野原は、戦場みたい、じゃなくて正に戦場だった。

俺の記憶が正しければ、俺がいた時代ではこの時代の事を戦国時代と呼んでいたはず。

まあ見た目とつか着てる物からして何となくそうなのかなとは思っていたけど、まさか本当にそうだなんで。

ほら、時代劇の撮影シーンにいつの間にか紛れ込んでたとか……  
まあそれもないか。

何故こんな事になったのかなんて俺が一番知りたい。

どうやったら元の時代に戻れるかも分からないまま、頼れる人も居ない俺は、五日経った今もまだボロい長屋に長谷川さんと共にいる。

「克己、お前帰らなくていいのか？」

「んー、帰りたいたいのとは山々なんですけど、俺道分かんないし。長谷川さんは帰らないんですか？家族の方が心配して……」

「いいんだ……」

長谷川さんは名前以外の事を教えてくれない。  
俺の事は沢山聞きたがるのに、自分の事は全然話さないんだ。聞くと、今みたいに消えちゃいそうな悲しい顔をするから、何も言えなくなってしまう。

たまに、泣いてるんだ。

夜、縁側で月を見上げながら。その姿を見る度に、胸の奥底が激しく痛む。だけど俺は目を反らせなくて、いつまでもその横顔を見つめてしまうんだ。

何故だか分からないけれど。

「……何故」

あ………まただ

長谷川さんが縁側で涙を流すのは、決まって月が綺麗な夜。月明かりに照らされた彼の姿は、触れれば朽ちてしまいそんな程脆く儂い。

一体何をその胸に秘めているのか？

暴きたい、知りたい、その想いを共有し、癒やしてあげたい。そう思う様になってから俺はよく夢を見るようになっていた。夢を見るのは決まって長谷川さんの涙を見た日だ。

11

笛を奏でる青年と、唄を紡ぐ少年。絡み合った音色は大地の緑に溶け込み、空の蒼に包まれる。

「幸せだね」

「そうだな………ずっと、こんな日が続けばいいのに」

少年の言葉に優しく笑んで、青年は口付けを落とす。

朱に染まる頬を愛しげに撫でれば、少年は恥ずかしげに瞳を綴じた。

心の奥がふわりと温かくなるようなくすぐったくて甘い夢。なのに、目覚めた時俺はいつも泣いていた。

「悲しくなんかならないのになあ」

「何がだ？」

「うっん、こっちの話。長谷川さん、今日何食べたい？」

「そうだな……克己は本当に料理が上手いから、私はお前の作るものなら何でもいい。それよりも……」

不意に長谷川さんの手が俺の頭を撫でた。差し込まれたのは冷たく細かい何か。

「これは？」

「簪だよ。知らないか？」

「知ってるけど……俺男だよ？」

「いいじゃないか、いつも美味しい飯を作ってくれるからその礼だ…  
…うむ、綺麗だ、克己は可愛いな」

心臓が跳ね上がる。

その笑顔は反則だよ……

「そ、そうかな？ありがとっ。じゃ、じゃあ俺魚釣ってくるから楽しみにしてて！」

気を付けて、と呟く彼の言葉を聞き終わる前に、俺は長屋を飛び出した。

小さな真珠があしらわれた可愛らしい簪を手にとり眺めながら、俺は小さく息を吐いた。  
まだ、熱が引いてくれない。

はつきり言って最近俺はおかしい。

何をしていても長谷川さんの事ばかり考えてしまう。

そりゃ、知らない世界に来て頼る人は長谷川さんしか居ないからお

かしい事でもないのかもだけど……いや、やっぱりおかしいわ。

だって俺が抱いてる感情は、頼りにするとかそんなんじゃないやなくて、もっと甘い感情だから。

「俺どうしちゃったんだろ？」

「何が？」

「ヒツ、お、お前背後からいきなり現れんなよっ！」

「わりー、何かお前一人で百面相してるから可笑しくて」

にかつと豪快に笑うこいつは真一郎。

釣りをしに出た小川で知り合った俺達は、年も近いせいか直ぐに意気投合し、こうしてたまに会っては色んな話をするようになった。

「お前も大変だなー、父ちゃんまだ病気治んねーの？」

「あ、ああ」

長谷川さんの事も俺の素性も、真一郎には内緒にしている。  
長谷川さんとの約束だから。

俺達が住んでいる長屋は山の奥にあり、滅多に人が来る事はないけれど、それでも長谷川さんは人の気配を異常なまでに警戒した。

誰かに出会っても長谷川さんの事は言わない事、そして自分の事も話さない事。

これが俺と長谷川さんが交わした約束。  
彼が何故そんな事を言うのか分からないけど、黙って俺は従ってる。

誰かに言ったら彼は、消えてしまいそうだから。

そんなこんなで俺は、病気の父ちゃんの為に魚を採って売り歩く  
勤労少年になってるって訳

「それより聞いたか？」

「何を？」

「鬼だよ鬼！最近村で噂になってんだけど、知らねーの？」

「鬼？俺あんま村の方に行かないからなあ、で、どんな噂なのそれ？」

「月が綺麗な夜、町の外れにある廃城に鬼の面を付けた男が現れるという。」

「何をしてもなく、天守閣と思しき部屋の窓から月を眺め、笛を奏でる。」

「その音色は儂くも美しく、そして悲しく町に響き渡り、町人の魂を誘うらしい。」

「何だそれ、嘘臭い」

「あっ、やっぱりお前もそう思う？」

「だって笛で人を殺すなんて聞いた事ないし」

「だよなー、物の怪じゃあるまいし。でも場所が場所だしなあ……」

「場所が場所って……?」

「あつ、やべ、俺母ちゃんに使い頼まれてたんだつた!長谷川城の話はまた今度なつ!」

走り去る真一郎の背中が見えなくなるまで、俺はその場に立ち尽くしていた。

「長谷川城って……偶然だよな?偶然名前が一緒なだけ……」

小さな引っかかりを胸の奥に閉じ込めて、俺は家路を急いだ

ただ、長谷川さんの笑顔が見たかったから。

その晩

俺はまた夢を見た。

深く、深く、心がシンクロしていく。

誰かの心の中に深く……溶け込んで、一つになる。

「……様、また戦が始まるのですか？」

「……ああ」

胸が苦しい

「それでは……様はまた行ってしまわれるのですね」

「すまない……必ず勝利をこの手に抱き帰ると約束する。この戦が終わればこの世はきっと平穩になるから、弥生……待っていてくれるか？」

嫌っ、行かないでっ、行かないで……僕を置いて行かないで……

「勝敗など、弥生にはどうでもよう御座います。僕はただ、貴方様が生きてさえいてくれればそれだけで……」

涙がとめどなく溢れて止まらない。

これは俺が流しているの？  
それとも弥生が泣いているの？  
心が……千切れてしまいそうだ

嫌だ、怖い、行かないで……失いたくない。

「僕は貴方様の事を愛し……」

「駄目だ。続きは帰ってから聞かせて欲しい。では、行ってまいる」

「はい……どうかご無事で……」

何日も何日も、待ち続けた。

ただひたすらに愛しい人の無事だけを祈り待ち続けた。  
毎日、沢山の人が城を後にしていく。主への忠誠など忘れ、逃げ出す様に去っていく彼らを誰も責める事など出来ない。

悪いのは彼らではない。

悪いのは……戦だ。

だから僕は待ち続ける。

城が業火に焼かれ、この身を刀が貫こうとも、ひたすらに……貴方様を待ち、焦がれる。

「……み、克己……」

俺を呼ぶのは誰？知ってる、俺はこの声を知っている。遠い昔から……

「竹……千代様」

頭を撫でる手の平から、動揺が伝わってくる。

「何故その名をつ……誰に聞いたっ？」

激しく体を揺さぶられ、俺は意識を取り戻した。だが目の前に長谷川さんは居ない。

「……長谷川さん？」

掴まれた肩は熱を帯び狂う程に熱いのに、部屋の中に気配がない。何一つ、彼の香りがしない。

この日から、長谷川さんは姿を消した。

俺は毎日待ち続けた。

ただひたすらに彼の帰りを待ち続けた。弥生の様に。

「真一郎……頼みがある」

俺がそう申し出たのは長谷川さんが消えてから一週間後の事だった。

「長谷川城について？んー俺あんま詳しくないぜ、それでもよければいいけど」

「それでもいいから、どんな些細な事でもいいんだ、教えてくれ…  
…頼む」

雲一つない夜空に、蒼の衣を纏った月が佇んでいる。  
何を言うでもなく、ただ静かに……

笛の音を頼りに俺は階段を登って行く。

朽ち果てた床に何度も足を取られ、体に傷がつこうとも、俺が歩みを止める事はない。

心を占めるのは、美しく儂い彼の笛音と彼を想う気持ちだけ。

やがて天守閣に辿り着き、愛しい人の背を見つけると、俺は静かに声をかけた。

「竹千代様」

ビクリ、その背が揺れた。

だが彼は振り向かない。

「……………どうして来たのだ？私を……………恨んでいるのか？」

小さく震える声が俺の胸を締め付ける。

どうして忘れていられたのだろうか？

こんなに寂しい思いをさせて、どうしてもっと早く思い出してあげられなかったのだろうか？

長谷川城は、俺が育った場所だ。

というより、俺が弥生だった頃過ごした家だ。  
今なら分かる。

俺は弥生の生まれ変わりなのだ。

城主の息子である竹千代と、城お抱えの庭師の息子である俺は兄弟の様に仲良く育った。

竹千代が頼忠と名を変え城主となった頃、友情が愛情へと変化を遂げ、二人は結ばれた。

だが、何にも代え難い絆で繋がっていた二人はある出来事によって引き裂かれる事となる。

戦が起きたのだ。

戦場で深手を追った頼忠。

勝利目前に、家臣に裏切られ心は地の底に落ちかけた。体中、血まみれになりながら焼け野原を歩く頼忠。

帰ると誓ったから、弥生を守ると誓ったから、それだけを心の糧とし城を目指した。

だが、彼の目に映ったのは業火に焼かれ崩れ落ちる城の姿。

薄れゆく意識の中彼は眩き事切れた。

「すまない」

と。

「恨んでなどいません。僕を見てはくれないのですか？」

「私は……お前を守れなかった。誓ったのに……」

「いいえ、竹千代様は帰って来て下さりました、僕の元へ。僕を守る為に戻って来て下さったのでしょう？」

「しかし……私にもっと力があればお前は死なずともすんだではないかっ！あの日程己の無力を恥じた事はない……」

「竹千代様、こっちを向いて下さい。僕を見て……」

「お前に合わせる顔などない……」

「そう……ですか。ならもういいです！」

肩を鷲掴み無理やり振り向かせると、彼は予想通り泣いていた。頬に流れる涙を舌で絡めとりながら俺は彼を抱きしめた。離せともがく彼を、俺が離せる訳はない。

深く、口付けを交わす。

緩やかな抵抗は口付けの波に溺れ消えた。

「僕はただ……貴方に謝りたかったのです。城を、竹千代様の城を僕は守れなかった。だから……おあいこです」

ふわり、暖かい腕に抱き留められ、涙が頬を伝う。

「お前は馬鹿だ……逃げれば良かったのに」

「竹千代様を置いて逃げるなど、考えた事ありません。もしそれで生き延びれたとしても心は死んでしまいますから」

嗚咽を漏らしながら彼は泣いていた。

どの位長い間待たせてしまったのだろうか？

朽ち果てたこの城で、どの位長く悲しい時を彼は一人過ごしていたのか？

その想いを胸に秘め、深い後悔に精神を蝕まれながら、長い時を独りきりで……

「竹千代様、笛を聞かせて貰えますか？」

「ああ……お前が望むならいくらでも奏ですよ」

それは美しい音色だった。

これまでの様な、儚さや悲しさなど微塵も感じさせない、力強く愛おしい音色。

鮮やかに蘇る記憶はまるで昨日の事のように、色褪せず俺を包み込ん

でいく。

俺は、もつれた記憶を解き放つ様に笛の音に誘われ唄を乗せた。俺だけに向けられる竹千代の柔らかな微笑みが、俺の思考をとろけさせていく。

「お前だけを待ち焦がれた。恨まれていても、蔑まれていてもいいから、ただ……もう一度弥生に会いたかった」

「……竹千代様」

「あの日の続きをしよう。弥生……聞かせてはくれないか？」

「竹千代様……愛しています。僕は誰よりも貴方様だけを、愛しています」

「私も弥生を愛している。お前だけを誰よりも深く……もうどこへも行くな……ずっと傍にいてくれ」

「……はい」

薄れゆく意識の中、俺は確かに聞いた。

「やっと聞けたよ……ありがとう克己」

そう囁く、愛しい人の声を

今日もまた、いつもと変わらない一日が始まる。

六時に起床して朝風呂で軽く汗を流し、新聞を読みながらトーストをかじる。世界情勢を知るのは良い事だし知識を詰め込むのは嫌いではないからね。

食事が終わったら制服に着替え両親が眠る仏壇に手を合わせ朝の挨拶をする。

そして、昨夜の内に準備してあった鞆の中身を念のため確認し、足りない物があれば補充してから学校に向かう。

いつもと同じ一日。

だけど、少しだけいつもと違うものになった。

あれから俺はずっと、何の為に頼忠と出会ったのか考えていた。勿論、頼忠と弥生がこの世に未練を残したまま消えてしまわない様にきちんと添い遂げさせてあげる、ってのも目的の一つだったのかもしれない。

だけど、きっとそれだけじゃない筈だ。

恋を知った俺。

胸にあるのは頼忠の微笑み。  
胸を占めるのは、今はまだ頼忠一人だけだけど、きっといつか俺にも見つかると思うんだ。

お前だけを誰よりも愛している、と心から言える相手が。

真珠の簪をそっと鞆にしまい込み、俺は今日も颯爽と外の世界へと飛び出す。

彼が弥生の生まれ変わりだという事は、頼忠の生まれ変わりもいる訳で。

彼はまだ知らない。

この先自分に降りかかる恋の嵐がある事など。

お終い

(後書き)

戦国時代が大好き！

という理由だけで書き始めた作品ですが、意外と気に入ってたりしますw

続編はまたの機会に。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5708s/>

---

戦の世に咲く恋の花

2011年5月14日11時09分発行